

セヴンティーン・ブルーの生命線

松井孝輝

雨が降っていてそれは線だった。雨は雨粒として降らない。初めから雨はみずからのことを線だと思い込んでいるし、主観のみが正しいのだから雨は線である。線はいくつも降り注ぎ、乾いた地面を濡らす。しかし当の雨は自分が世界を濡らしているとは思っていない様子で、つまり彼らは恣意や無意識の関与らない地平でただ降るべくして降っている。線は光に照らされると彼ら自身の輪郭を湛えているということがわかる。線には色がある。光るとそれがわかる。例えば銀の線、例えば金の線、それらが降る降る周りに、きみは佇んでいる。雨が線であることを知らず、線に濡れることを煩わしく感じているきみは、これから人を殺す。きみの父親が国境警備隊に人違いで殺されたときも、同じように線が降っていた。乾いた砂の上で横たわる死体が変わったきみの父親を、同じ線が濡らしていた。きみはそれを知らない。きみが知っているのは、父親を殺した警官がたった今、国境警備の任に当たっていることだけだ。そして線は、きみの草臥れたズボンのポケットに錆びたナイフが入っているということを知っている。きみの殺意は父親への愛情に由来している。それはきみの魂に住んでいる戦争が次々に繊細な手つきで風船を割っていくからだ。線とはつまり戦争のことで、人が殺し殺されるとき、必ず線が風船を割る。虫がきみの周りを飛んでいる。もうしばらくすると線に濡れた虫の羽は機能不全に陥り、虫の小さな躯体は線の質量に撃たれ重力に従って落ちる。再び飛ぶことのできない虫は線に溺れて死ぬ。虫が死ぬことと、きみがこれから人を殺すことは無関係だ。でもきみには、自分のせいでこの虫が死んだのだとすら思えるだろう。おれの魂が風船を割るから、おれの肉体が人を殺そうとするから、だから雨は線として降り、線が虫を穿ったのだと、きみはそう思うことができる。それが戦争だ。国と国の戦争、でなくともいい。きみと虫との間に発生した戦争は（それは知らぬ間に発生している）街を焼き、文明を滅ぼす。戦いに巻き込まれた意思の兵士は雨の線に濡れて死ぬ。虫が死んだこと、それをきみは忘れない。雨が降っていてそれは線だった。人を正しく殺すにはみずからが線になるほかないがきみは線になれないから正しく人を殺せない。国境警備隊員を殺そうという無謀な企みを止めてくれる人はきみの周りにはいなかった。薬物に堕ちて半狂乱になった母親はもうきみの名前を忘れた。五歳の妹が犯され川底に打ち捨てられたのはきみが十歳の頃だ。一週間前に殺された父親がきみの最後の肉親だ。殺せるならもう誰でもよかったんだろう？ と線が尋ねると、きみの魂はダン

マリを決め込んだけれど、相変わらずきみはわかりやすい性格をしているから、行き場を失った愛の反動としてやってくる殺意を受け止めてくれる肉の塊があれば、それさえあればきみはよかったのだ。暴力と薬物が結婚して生まれたのがこの街で、きみの世界はこの街だけだ。きみは街に絶望するのをもうやめてしまった。この世界には骨だけが残っていて、あとは時折草花のまわりを紋白蝶が飛んでいる、それくらいの世界であるということに絶望しきったきみは、虐殺の夢を見る。眠りに落ちるときみが見るのは虐殺が終わったあとの街だ。年中街角で楽器を弾いていたあの老人、皮膚病に罹って隔離されていた若い女、かつて青春を共にしたきみの友人、カメラを持ち歩いている外国人、狂った娼婦、片目のない少年、誰もが虐殺の街で死に絶えた。きみは夢の中で虐殺の副産物として生まれてくる彼らの死体を見つめている。殺された彼らが砂に汚れたトラックに積まれていくのをきみは見つめている。死体の過積載でタイヤが沈んでいくように絶望を過剰摂取したきみは、感情が反転して美しい太陽の光と、銃声と共に散る火花との見分けがなくなってしまった。早く金を稼いでこの街から脱走するのだと爛々と輝いていた少年時代のきみの目は、父親の死と同時にどろどろと淀んだ。そうしてきみは若くして世捨て人のごとき厭世のコツを手に入れ、トンネルを抜けるとそこは雪国でもなんでもなくただトンネルの外に到着するだけ、という悲劇的な事実を、感情の速度を変えることなく当然のように受け入れることができる。雨が降っている。雨は降りたように降っている。きみの意志も絶望も殺意も愛もすべて無視して降っている。だから雨は線なのだ。きみは線になれない。きみは建物の影から国境の検問所にいる男の姿を見ている。父親を殺した国境警備隊員の名前を教えてやろう。と線は囁く。不要だ。きみは答える。雨が降っている。街が濡れていく。きみは街が濡れるということについて、いまだに信じられない気持ちでいる。久しぶりの雨に街は浮き足立っていた。家の扉の前には錆びついた金属の皿が差し出されていて、雨水が茶色の濁りを獲得しながら貯まっていた。砂埃はすべて雨の線によって撃墜され、湿度の上昇によって皮膚はねばついていった。雨が線であることを知らないきみは線に紛れる。しかし線になれないきみは雨の中では徹底的に異物だ。線の世界に弾かれたきみは悲しみの輪郭を撫で、その内部が間違いなく空洞であることを確かめるとポケットの中でナイフの柄を握った。きみが身を隠している辻を右に曲がると、国境まで真っ直ぐに道が伸びている。殺人の準備はできている？ 線は再びきみに尋ねる。きみは頷かない。線はきみに味方しない。しかし敵でもない。線は降り注ぎたいように降り注ぐだけだ。花を咲かせるためでも、渴きを癒すためでもない。きみの心臓が勝手に生命をつづけるように、線は降ることで脈打っている。線は生きているのだ。きみは生きているか？ これから人を殺すきみは、生きていないから人を殺すのか。生きている人が生きていない人を殺すのか、生きていない人が殺されて正解、あるべきものはあるべき場所に片付けましょう、と母親が赤ん坊に教育するように世界は子宮の内側へと収束していくのだろうか。きみはその答えを知らない。これから人を殺すきみは、これから人を殺すきみ自身によって殺される。殺し殺されの輪に介入することに成功するということは、同時に生命を失敗するということもある。きみは走り始めている。国境の線に向かって道を真っ直ぐに進んでいる。人を殺そうとしているきみの手にはナイフ。人を殺すための

ナイフが握られているきみの手は人を殺す手で、人を殺さなかった人の手には戻れない人を殺す人の手だ。心の中の戦争は風船を割っていくが、実のところきみにはほとんど殺意らしい殺意はない。殺そうとしているのでも殺されようとしているのでもない。一年が三百六十五日か、あるいは三百六十六日か、どちらであってもじつさいの生活にはほとんど何の影響も及ばさないように、殺そうとしているのと殺されようとしているのでは何の違いもないが、きみにはそもそも殺し殺されの意識がない。ただ、赤ん坊が散らかした玩具を母親が片付けるように、殺された父親、狂った母親、犯された妹、散らかされた玩具を、あるべき場所に戻す母親の気持ちで、きみはナイフを握っている。それは愛情に似ているかもしれないが、実は全くの別物で、きみは線にはなれないものの国境に近づくにつれて限りなく線に漸近していくだろう。ナイフときみの手の間に愛に似た磁場が発生し始めるその時、きみの名前を呼ぶ声がする。声が響き、雨の向こうにきみの恋人がいる。きみは思わず立ち止まって握っていたナイフを背中後ろに隠す。恋人はきみを問いただす。そのナイフで何をしようとしているのか、恋人にはすぐにわかる。視界の端が本のページみたいに捲れる。そういうふうにならぬ光が入ってくる。恋人はきみに近づいてきて肩を揺さぶる。これから人を殺す人の手に触れる手がある。きみの恋人はきみに人を殺さないでほしいと思うだろう。きみは恋人の手を振り解く。音を立ててナイフが落ちる。きみは破壊したがつている。破壊と消滅では根本的に仕組みが異なるのだが、きみはそういった細かいことは考えたくない。積乱雲が見えたつもりになっていたきみの魂はもう殺さなきゃどうしようもなくなっていた。きみはナイフを拾って、殺すために再び国境を見据える。恋人が叫ぶ。国境はすぐそこだった。父親を殺したあの男の顔が見えた。父親の仇を殺して美しい物語に殺されたかった。きみの恋人の叫び声に国境警備隊が気づいた。きみはただひたすらに線に沿って走った。きみには何も見えていないし何も聞こえていない。線だけがきみを支配する線だけがきみで。恋人の叫び声も、きみに向かって拳銃を構える警官も、きみにはわからない。警官が発砲する。線形の弾道を描いて弾丸が回るるん、ときみに向かう。銃弾は届く。雨と銃弾の軌道が直交したその交点に、どこから見ても目が合う肖像画のひみつが隠されている。雨の線・弾丸の軌道は方向を見失い、家なき子がかがり火の温もりに記憶の母を夢想するように、銃弾はきみの空洞を目がけてのびてゆく。一発。二発。三発目がきみの胸に着弾する。銃弾はきみの柔らかい皮膚を突き破り右の肺を貫く。きみはその場に崩れ落ちる。砂の大地に血液がどぼどぼと流れ出ていく。どぼどぼどぼ。きみの体にできた新品の穴から生命が流れ出ていくどぼどぼ。恋人が泣き叫びながらきみを抱きかかえる。警官たちがきみに向ける銃口がきみにはゆらゆらと実っている熟れた果実のように見えている。国境警備隊がきみを取り囲む。息がしにくいきみは口を開けて喉をひくひく動かしてみても喉がひくひく動くだけで何の成果も得られませんでした。きみの恋人は警官の一人にどこかへ連れて行かれてしまった。この街で逮捕者がどんな道を辿るのかきみはよく知っているだろう。砂が口に入ってきて雨も入ってきた。線を食べると血の味がして、実のところきみが食べたのは血と砂が混ざった塊だ。警備隊は何やら話をしている。雨の中ナイフを握りしめて国境に突進してくる死にかけの少年をどうするか話合っている。雨脚が強くなる。線の数が増える。動けないきみの体に刻み込むように深く線は降る。線はきみに一度目を瞑ってみることを

おすすめする。きみは線の言うことに素直に従ってみようと思う。目を瞑るとききは暗くて遠い。おーい、このまま死んでしまふんじゃないぞーと線は呼びかけたが、きみはもうかなり遠いところに行ってしまったっていて線の声は届かない。きみの臉の裏に映っているのは、悪意の街で破滅した家族の姿でも、虐殺の夢の景色でもなく、心の中で風船を割り続けている戦争の姿だ。戦争は首筋を搔きむしりながら抱きしめるようにして赤い風船を割っていく。風船は直線上に浮遊した状態で並んでいて、戦争はゆっくりと向こうに行く、つまりきみから離れていく。戦争は情けない顔をしていて、それがあんまりにも神経を逆撫でするから思わずきみは戦争の顔を殴ったが、殴った後に気づく、戦争はきみによく似た顔をしている。目を開くときみの父親を殺したあの男がきみを覗き込んでいる。きみにはもう自分が心から父親を愛していたかどうかも曖昧だ。とうとうやる気を出したきみの前頭葉はいまさら、家中に転がっている酒瓶のイメージときみの父親のイメージを繋いだ。思い出される記憶の中の父はいつも酒をのんでいて、きみの横腹にある黄色い痣は父親に殴られたときにできたものだ。復讐という物語は、きみが人を殺して世界から弾き出されるための口実でしかない。世界は終わりに近づいていつてるときみは思う。きみにとつての世界はこの街だけだったけれど、きみは決して見当はずれなことを言っているわけではない。生まれたときから世界の悪意に溺れていただろう。きみはきみは。きみは溺れていただろう。伸ばした手を掴んでくれるものはおらず、自由意思の雨が濡らす街の一部としてきみの手は化石化した。手。きみの手指が化石になるなら、かならずそれを掘り起こす人がいる。遠ざかる記憶のなかで線に汚れながら延べられた手を。安心するといい。けれど、きみはもう何もかも嫌になった。もう二度と人間になりたくない。きみは叫んだ。魂があるから叫んだ！ もう二度と人間になりたくない！ 手を伸ばせ！ それを掴む手がある。そして殺した。きみが手を伸ばした先に、きみを覗き込む男がいて、きみの伸ばされた手には殺すためのナイフが握られていたから、きみのナイフは男の喉に突き刺さって殺せた。男はきみに覆いかぶさるように倒れ込んで、きみはその重さに父親の記憶を思い出す。男の血が垂れてきみ降りかかって、血も線だった。これが雨よりも温かいのだからきみは大笑いする。国境警備隊は砂の上に倒れるきみから男を引き剥がし、無防備なきみに向かって一斉に引き金を引いた。きみは興奮にぶるぶると震えて、撃たれながら砂の上で踊った。これもぜんぶきみが見る虐殺の夢かもしれないね。線は笑う。痛かった？ 銃弾に撃たれたきみの胸は、あるいは、きみの胸に立ち向かった銃弾は、果たして痛かった？ きみの痛みはきみだけのものだがきみの痛みのイミテーションはきみ以外の誰かに確かに痛みとして作用しうるから重くて痛いきみは安心して痛がれる。きみの痛みを原作として脚色され、言葉にされ、本になり、映画化され、そうして金になるきみの痛みの子らが、偽物であると同時に絶対にきみの子であるということがおかしくてたまらないきみは、息がしにくくて困る。肺は空気を貯蔵する能力を失って、穴から酸素は抜けていく。浴びせられる銃弾の雨は痛いというよりも熱くて、薄氷に踏み込む最初の一步のような慎重さを見せながら意識は雨に碎かれていく。きみがあの男を殺せたかどうかはもうどうでもよかった。きみのナイフが男の体に刺さったというだけで、それは殺害と同じくらいの意味を持つ。遠くに国境が見える。国境の線が見えることをきみは知っている。大洪水の香りがする。もう二度と、大洪水の香りがする。もう二度と人間

になりたくない大洪水の香りがする人間。の線。の手。大洪水になりたくないもう二度と人間香りがして、ねじれてからもう一度ねじれて、意味と景色の整合性がなくなってくる。そもそも意味あるものなんて滅多にないだろうと悪態をついて、雨に撃たれながらきみは死にかけている。血が出ているのか、血の隙間に自分がいるのか、曖昧になってきたところで、きみは肩甲骨に違和感を覚える。骨から骨が生えてくるような疼き、渦の中で渦に逆らって渦巻く渦が権利の主張を開始するような渦き、それが確かにきみの肩甲骨にある。といえどもきみの肩甲骨はすでに銃弾に撃ち砕かれているから、きみの違和感はいわゆる幻肢痛の類で決して実在するものではない。そうしてきみはフィクションの飼主になる。しかし期待してはいけない。もう二度と人間になりたくない！ きみは諦めなければならぬ。線と線と線と線が言う通り……きみは天使になれない。——大洪水。きみの消えかけた視線のその先に、国境がある。国境の白い線は、きみの視線に耐えかねてむくむくと膨らみ、波打ち始めた。線は空気が吹き込まれた風船のようにどんどん膨張していき、その膨張はやがて到来する破裂を予感させていた。国境警備隊は引き金を引く仕事を中断して背後でドウドウとゆらめく膨らんだ線を目の当たりにする。線はすでに人間の体長の三倍かそれ以上には膨らんでいて、もはやそれは線というよりも壁に近い。きみは見つめている。街は混乱に陥る。きみは笑っている。人々は駆け回り、犬は吠え、雨は嬉々として降りしきる。感情を楽器として現象を楽譜とするのなら、この街はひとつの組曲になる。指揮者がタクトを振れば振るほど線は膨らむ。国境は長く続いていく。西に行くと海にぶつかる。東に行くと紛争をやっている国に続く。この国を囲む国境の線すべてが全身全霊で膨らんでいる。着々と時が近づいてくる。地獄は背後にあって、時間は目の前にある。大洪水の香りがする。きみはその匂いを知っている。いつ、どこで知ったのだろうか。きみは死にかけた体で考える。誰のものか分からない記憶をいくら辿っても、その果てにある感情も誰のものかわからない、きみのものではない。しかしきみは人に生まれたから想像することができ。想像力をはたらかせる。想像しろ。線が言う。もう一体なんの線に話しかけられているのかきみはわからない。雨の線・銃弾の線・国境の線、それとも、何か他のきみの知らない線か、なににせよ今のきみにはあまり関係のないことだった。ただ声に耳をすませていた。想像しろ。きみは無い肩甲骨に違和感を覚えるのを諦めないまま、散らかった脳みそを掻き集めるようにして、想像した——パチン——ときみの戦争が最後の風船を割った、その音と同時に、膨らみきった国境の線は破裂した。線の中からは大量の水が溢れ出てきた。それは一気に街に流れ込み、きみも国境警備隊もきみの恋人も、すべてを飲み込んだ。きみは乾いた舌で水を舐めて知る。この水は雨水で、きみの知らない時代、知っている時代、知らない記憶、知っている記憶、知らないすべて、知っているすべてとともに降った雨の線だ。雨の線は長く伸びて国境の線になっていったということを、きみはこうして知るのだ。きみの戦争は最後の風船を割ってしまった後に、それが最後の風船だったことに気づいた愚か者だった。大洪水の訪れだ。街は呑み込まれる。すべてを流し、すべてを沈める大洪水が訪れ、きみは流され、きみは沈んでいく。溺れるのは心地よかった。悪意の街に溺れたところで体の中は質量を持たない罪悪で満ちていくだけで、それなら水中で水に満たされてしまう方がよかったから。あたたかい水だった。あたたかい命が混ざっていく音がした。きみたちはこの水の中

でやり直せる。ぼろ切れのようにくたびれたきみでも、再び……。すべてはあるがまだ。あるがままにあることを線は要求する。いつか水が引いたとき、そこに残っているのは骨だけかもしれない。けれど、その周りに小さく咲いた草花の周りを紋白蝶が飛び回っていれば、それくらいの世界を愛することができれば、それで十分だ。線に呑み込まれた世界の中で、きみはきみと出会う。何をしているの？ きみはきみに話しかける。そっちこそ。きみ、名前は？ きみは答える。同じ名前だ！ きみは驚いた様子でやわらかく笑う。きみもつられて笑った。どこから来たの？ 洪水に呑まれたんだ。きみは？ いっしょだ。ぼくの街の水も溢れちゃつてさ。そうなんだ。きみは、これからどこへ行くの？ さあ。どこか流れ着いた場所で生きてみようと思うよ。すべてはあるがままになるらしいから。きみは？ どうしようねえ。これから、どうなるんだろう。よくわからないから、きみと同じようにしてみるよ。それはいい。……きみに会えてよかったよ。こちらこそ、ほんとうによかった。きみに会えて。忘れないうちに言っておきたいことが……。きみは、きみは……。きみ、は……。と、ここできみは乱暴な手つきで救助隊に引き上げられる。きみはぬるい膜を突き破るように氾濫した川から運ばれ、担架に乗せられる。オレンジ色の服を着た救助隊員が心臓の止まったきみの胸部を圧迫し、心肺蘇生を試みる。きみの母親はそれを隣で心配そうに見ている。雨が強く降っていて、死にかけのきみはもつと降ればいいと思った。きみはすぐに救急車に乗せられ、サイレンの音を聞いた。サイレンよりも近くに同乗している母親の啜り泣く声が聞こえて、それよりも近くに救助隊員のカウントが聞こえる。それらを耳にしながら、きみは、ああ、日本語だ。と脈絡もなく日本語の言語学的な素晴らしさについて思いを巡らせたりした。しばらくして、彼らの努力の甲斐あってきみの心臓は再び動き始める。大雨で川が氾濫しているから気をつけなさいと言っていたのにこの子自分から川に飛び込んだんです、と嗚咽するきみの母親はきみを心配しているがきみはそんなこと気にする素振りも見せず鬱病患者の目で世界を恨んでいる。きみの住むこの街には町内を東西に分ける大きな川が流れていて、きみが飛び込んだのもその川だ。おそらく正しい名称がつけられているのだろうが、きみはその川のことをただ単に川と呼んでいる。そしてきみはどこまでいってもきみだから、川が線であることに囚われて動けずにいる。この川は街を貫く巨大な男根なのだ！と叫ぶだけ叫んできみはきみの部屋できみなりの自慰にふけるばかりで、要するにきみは、自分は死にたい星からやって来た死にたい星人なのだ、とわざとらしいお道化に徹し、含み笑いと共に希死念慮を無理矢理に飲み下して、そうやって人生を茶化してやり過ごしてきた十七歳の少年だった。しかし飲み込んだ希死念慮はまだきみの胃袋の中で鼻歌を唄っていて、消化不良を起こしたきみの体は音を立てて崩れ始める。きみは恋をしていて、それはこれまでの生命の中でひとつずつ丁寧に拾い上げてきたものを、ひとつずつ丁寧に焼却処分していく過激な断捨離癖のような恋で、きみの好きな人はきみのことを好きじゃないからきみの死にたい気持ちには加速する。好きな人の運転する車の助手席に座って、足元の発煙筒にどぎまぎしたいと、本当はそう思っているのに口にしてしまえばそれは愛の告白だろうから、きみは躊躇する。告白してしまえばいいじゃないかと、川がきみに語りかけるように唸る。恋と性欲のちがいがわからないんだ、ときみは間拔けた表情でしかし真剣に泣いてみせるから、川だってそれには困惑してしまう。きみは川に飛び込んでから二日間だ

け入院し、それから精神科に通院することになった。処方される抗うつ薬を飲んだふりをしてすべて川に投げ捨てたきみの友達はやはりその川だけで、川はいつもそこにいて、水質は悪いのだけれど表情が豊かできみは好きだった。きみは好きな子の名前も趣味も特徴も川に教えてやらなかったが、実のところきみの好きなその子は川に似ていた。多くを語るわけでもなくただそこにいて、しかし胸の奥ではいつも思い悩んでいて、肌は少し汚いのだけれど実は表情が豊かだった。きみはこの街の地図を開いて、街を縫うように流れる川の線をなぞった。きみがあの日川に飛び込んだのは、別に死のうと思っただけではなくて、呼ばれた気がしたからだ。何に呼ばれたのかはわからないが、よく考えればわかるような気もした。川は深く黒く、あたたく、きみは川に憧れた。きみの好きなあの子、あの子との記憶をとしびのようにして、きみは深く暗い洞窟を歩んでいく。恋は暴力の速度に近いから、松明の火で野犬を追い払うようにきみはとしびを愛している。きみが話す、季節の変わり目には縫い目があって、遥かに続いているそれを指先で辿るとそのさきにきみがいる、という伝わらない愛の告白の婉曲表現をきいているきみのとしびは、きみの話をよくわからないでいるが、きみが話してくれたことを大切なオモイデとして保存するために適切なリズムで頷く。しかし話をしているきみも、話し言葉には自信がないから自分の言っていることがだんだんわからなくなってきた、よくわからないことを共有する地平においてきみたちの目線の高さはちょうど同じだった。というようない一つの土地を共にする瞬間にこそ、きみは自己同一性を失ってとしびに混じる。きみがきみで、かつ、きみがきみ以外である、かつ、きみ以外の存在はとしび以外無い、という状態にエロティシズムを感じて、それは恋ではないかもしれないがきみは怖い。むしろただひたすらに孕ませたいと思うような純粹な欲動に終始していれば、毛布に硬さを感じずに眠ることができるのだが、きみは人を傷つけるのが怖いから心から十七歳だった。きみは授業中に、若者が音楽を聴くと道を外れるとの理由でタリバンが街中の楽器を焼却したというニュースを見て、すぐに学校を抜けだした。おれも楽器を焼かなければ！きみの脳内では、恋愛の揺らぎは自身の内的な不道德が由来していて、音楽を捨てれば道德を獲得できるはずだ、道德を獲得できれば道德的に正しい恋ができるはずだ、とシナプスが踊るように乱暴な直線を描いていた。昼間の家には誰もいない。きみは帰宅すると階段をかけ上がって部屋に乗り込む。窓が開け放たれていて、壁に立てかけてあったギターに風を含んだカーテンが触れて不協和音を鳴らしていた。弦はひとつ残らず錆びていて、きみはそのアコースティックギターを掴んで家を飛び出し、物置から灯油缶を引っ張り出してきて、チェーンソーを持った殺人鬼のような風態でゆらゆらと街を歩いた。行き先は決まっていて、少し歩くときみの視線の先には川がある。川はきみのことをいつも待っている。川は笑っていて、きみは川辺にギターを放り投げる。きみのとしびは軽音楽部で、文化祭でひとり、ステージに立って知らない歌を歌っていた。これ以上ないくらいに盛り上がらなかったが、きみがとしびに出会ったのはその時だった。このギターもわかりやすくそれに影響されて買ったものだった。燃やすのかい？川はきみに尋ねる。きみは黙って砂利の上で横たわるギターに灯油をぶちまけた。楽器を燃やすのに必要なのは、至極簡単に手に入るちよつとした覚悟くらいだということを、火のついたマッチをギターに投げつけた時にきみは知る。ゆるく寝巻を着るみたいにギターは薄い炎をまとい、楽器

は燃やされた。きみはもつと赤々と燃える様を想像していたが、実際の炎の色は背景に紛れて見えにくく、空間が揺れているから燃えていることがわかる程度で、あとは黒い煙が立ち上ったからそもそも空間の揺れ自体が隠れていた。なんにせよ、楽器は燃やされた。が、これで崩壊したと思われたきみの道徳は復活しただろうか？ きみはしばらくの間燃える楽器を見つめていて、火が消えると再び灯油を注いで、マッチで点火した。気が付くと暗くなっていた。きみは燦る楽器を置き去りにして帰路につく。これできみはきみのともしびを正しく愛せるかな？ 川は言う。川は死んだ楽器を抱き、弔うように流れた。水は流れるままに流れて、川は望んだ形に街を生きていた。家に帰ると、居間に知らない男がいた。きみの親戚だとか、両親の友達だとか、そういった関係性の外に男は存在していて、つまりほんとうにきみはこの男のことを知らない。母親はまだ仕事から帰ってきていない様子で、鍵は閉まっていたはずなのに、男はそこが住み慣れた自分の家だと言うような態度で深々と居間のソファに腰を沈めていた。きみは驚いて言葉を失い、通報しようとしてポケットから取り上げた携帯電話が震える手をすり抜けて落下した。白いポロシャツを着たその細身の男は楽器屋と名乗った。楽器屋は君に言った。きみは丸ごと偽物である。きみの言葉は、きみの声は、きみの体は、きみの輪郭は、すべて偽物で、すべて誰かの引用である。その声は低く落ち着いていて、きみはどこかでその声を聞いたことがあるような気がした。きみは、落とした携帯電話を拾い上げて、喉を絞るようにして、おまえは誰だ、と口にした。楽器屋はただ、楽器屋。昔は庭師だった。と答えるだけで、きみの知りたいことを教えてはくれない。きみの家は森を切り拓いてつくった土地にあるから、静かな日には風で森が揺れて波のような音が聞こえる。そおそお、とすぐそこに海があるかのような音が聞こえるのだ。きみはその一瞬だけ、世界が鳴らす音を阻んで、森の波の音だけを聞いた。そおそお。それと同時に楽器屋はきみの鳩尾を殴っていた。きみは体を半分に折るようにして吹き飛ばされ、背後のダイニングテーブルに背中を打ち付ける。意識と関係なくしゃくり上げるように喉が痙攣するのできみは呼吸ができなくて苦しかった。苦しい、痙攣、苦しい、痙攣、を等間隔で繰り返すその動作はまるで恋のようで、苦しい、痙攣、苦しい、の次の痙攣を待っている間に楽器屋の次の拳がきみの脇腹を突き上げて、きみは嘔吐して胸元を汚す。吐瀉物が喉に引っかかって咳き込んでいるきみはあまりにも無防備で、暴力を受け入れる準備ができていなかったから、次の拳を正直に鼻筋で受けてしまっただけで血が出た。痙攣や咳などの身体の反射というのはきみ自身の肉体を守るものでもあるのだが、外部からの暴力を受け止める責任能力を失った状態でもあるから、楽器屋はそれを知っていて、上手に暴力を振るう。目の奥が燃えるように痛くて、殴打、視界がどろどろと苦くなっている、ここでもまた殴打、言葉の届かない場所を見るようになった。きみは家の中にいるはずだけど、きみの知っている景色はもうきみの目には映っていないくて、きみときみ以外がまじりあった、言葉の届かない場所だけがきみには見える。そこへはゲームの隠しステージに入ると同じように、暴力のスピードに吹き飛ばされることのできる。暗い部屋、そこでは造花が一本咲いていて、周りを泥と炎が囲んでいる。部屋は遮光カーテンで閉ざされていて、暗い、自分の指先の形もわからないほどに。きみはその知らない景色の中で暴力を受け続ける。痛くて痛くて痛い、暴力に対抗する手段をきみは探すことができなくて――なにしろこんなにも暗いの

だから――暴力で対抗するしか生存の術がないと思う。殴打が止むと、きみは着ていたシャツを脱がされる。楽器屋はシャツを丸めてきみの口に振じ込む。布でできた球体はきみの顎を外し、唾液で濡れれば濡れるほどに重量は増してきみの筋肉は硬直していく。口が大きく開かれた状態では目が十分に開かないから、視界はいつもの半分以上しか無く、きみはもうどうしようもなく反撃の術をなくした。楽器屋は無言できみを殴り、きみは殴られるたびに呻き声をあげるから、そのうちのひとつに*Sig.*が反応した。殴られながら、きみは暴力は原始的な色をまとった一個のフィクションだから、と思う。暴力の最中、そこに確固たる被／加虐者の関係が発生してしまうと、餌にありついた獣のように物語は集まってきてあらゆる偶然性をフィクションとして回収していく。その場に残されるのは朽ちかけた骨と、言葉の届かない部屋での孤立だけだということが、きみは悔しかった。痛みは火をおこして、火は柔らかい皮膚を焼いた。どうして殴られているのかもわからないままきみは殴られ続け、白くなった脳みそが死の予感を叫んでいた。川の声がして耳をそば立てると、自分の骨が軋む音の他に、楽器が燃える音が聞こえた。ぱちぱちと火が爆ぜていて、波のような殴打のまにまに、きみは火の弱まっていくのを聞いた。それは楽器屋のくしゃみとほとんど同時で、外で大きな風が吹いた。それとともに火の爆ぜる音は聞こえなくなり、それから楽器屋の暴力は止んだ。きみはほとんど意識を失っていて、再び確かな目で世界を睥睨した時には、あまりの眩しさによるめいてしまった。あらゆる出来事が光を放っていて、時計を見ると十七時だった。いつの間にか楽器屋は姿を消していた。きみは中世の外科医と接続されたきぶんを手のひらにのせて、お前を切りひらいてやる、という類の愛情／殺意を湛えながら胸の中の水瓶からメスを取り出した。きみはそのまま洗面所の鏡に向き合って怪我の具合を確かめようとしたのだが、どういうことか、きみの手の上のメスだと思われていたものは炎と泥だった。炎が炎自身を燃料として燃え続けていて、泥はゆるく淀んでいて明るさを含んでいた。きみはためらうことなく手の上の炎と泥を混ぜ合わせて、顔面に塗りたくる。炎は一瞬で顔の上を燃え広がって、きみの頭は炎に包まれた。炎はあたたかくも冷たくもなく、ただ実在の感覚のみが張り付いている。炎の奥のきみの顔は焼け爛れ、火傷は、しなびた向日葵が晩夏の夜の化け物になってしまふのとほとんど同じ仕組みで発生するということを思い出させる。きみの目は炎を通して世界を見る。火はふるふるると揺れていて、光あるものの光を増幅し、光ないものを映さなかった。首から上が丸ごと火の玉になってしまったきみはきみで、今のきみ自身に満足している。今ならきみはもしびと共に生きることができると思った。としびがきみで、きみがとしびになれると確信していたきみは、鏡に向き合ったまま川と会話する。聖書になりたい。きみはそう川に言う。聖書？ おれがあの子だけの聖書になりたい。川はきみの肩を叩いて勇気づける。きみにはなんだってできる。世界はきみだけのものだから……。きみは家を出て川沿いを線になつて歩く。世界は溶け合っていて、時計の長針と短針は常に重なり、交差点は一本の直線に見えた。あの庭師は、きみの好きなあの子の両親がきみに差し向けたものだよ……。川はきみに伝える。きみがふさわしい人間かどうかを試したのさ。ふさわしい人間？ ふさわしい人間。愛するにふさわしい人間。自動車が向かってきて轢かれそうになる。歩道で点字ブロックが交差している、と思ったらしいいなかった。浴衣を着て手話で話す二人の女性とすれ違う。人心のゆらめ

きを見て見ぬふりするきみを、きみは顔の炎で焼き殺した。きみには世界のすべてを見つめる責任が生じる。世界はきみのものだから！ 見る。きみは見るだろう。脊柱に支配されているファストフード店、デジタルサイネージの光を浴びている、天窓の行方を知らない少年、ひとりで梯子をのぼる影絵、壊れたドアノブ、カメラのレンズが貫く脇腹、傷、壁や天井が溶けてどろどろの液体になった家、その記憶を。きみの好きなあの子の親はクソだよ……。川は動いている。夏の陰影を孕んで、川は呼吸するように動く。行こう。燃やせ。行こうよ。きみは歩いている。どこに向かっている？ もちろん、ともしび。木々の生やすあらゆる葉の一枚一枚がこの夏に燃ゆる緑色の炎だ。川は街を貫く巨大な男根だ！ オモイデぜんぶ燃やせ、きみはきみだけの光を探せ、きみ自身が光れ。街を食いながら歩く炎がきみだよ。ともしび、ともしびのことが好きなきみは、きみがともしびかもしれない、ともしびをきみとして、きみをともしびとするのなら、きみはきみを愛しながらともしびはともしびを愛しながら、きみの痛みをともしびの痛みとすることを許すだろうか。行こうよ。またきみは車に轢かれそうになる。ヘッドライトの光が眩しいけどあれは光じゃなかった。うその光で溢れているのが嫌だったからきみの目はうその光を通さなかったから轢かれそうだった。あれは？ 光っている。道は？ 光らないでほしい。魔法みたいだね。川。光る。光れ。天窓からさす青い光、うそ、少女の三つ編み、光れ、海、光れ、スニーカー、光れ、心臓、光れ、魂、うそ、自転車、うそ、風呂場のぬめり、光れ、国、光れ、階段、光るなよ、髪の毛、光れ、ナイフ、光れ、カメラ、光れ、紙束、うそ、葉桜、光れ、季節、光れ、、、きみはきみのともしびの家を見上げる。それはきみのともしびの家で、きみのともしびはきみだからきみの家でもいい。きみはきみのともしびのきみの家の塀を登って庭におりと、物置ききの扉を開けて灯油の入ったポリタンクを取り出す。きみのともしびの両親はきみのクソだよ……。川は川。うつろい深く黒い。きみは灯油を庭に生えていた大きな木にかけて、それから家の壁にもぶちまける。きみは庭の隅に枯れ木が集められているのを見つけて、そのうちの一本を手に取り、きみの顔の炎で着火した。枯れ木の先端には火がくっついていて、きみはそれを灯油で濡れた壁に投げた。視界が一瞬で明るくなって、光った。燃えた。きみは庭を出て、少し離れた場所から家が燃えるのを眺めていた。川はの水位は低く、穏やかだった。燃える光は正しく光っていると思えてきみは嬉しかった。火事に気づいた人々が少しずつ集まってきて、きみはどこでもない場所に向かって歩く。どのみちきみは炎を通せばあらゆる選択肢がつながった一本の直線にしか見えないのだから、向かう先などどうでもいいことだ。きみは川を見下ろしながらその流れを宙に描いた。ほのお頭のきみの指先から、線が伸びていき、街を迂回して、這うように進み、きみの線は、きみを求めて伸び続け、線は、線は、リストカット——線はきみの手首の上に浮いた赤い線につながっている。きみがカッターで伸ばしたその線からは血が滲んで熱かった。きみは学校のトイレにこもって、消えかけの傷痕の上から線を書き足す。肛門に空気入れを突っ込まれて、体の中の中の中の中を気色の悪い感情でパンパンに膨らまされたきみは、そのままでは苦しくて死んでしまうから手首に切り込みを入れて出口をつくってやる。線からは風船が萎む速さで感情が抜けていき、きみの破裂寸前の心臓は元通りの速さに戻っていく。はやく、はやく、ときみの体はきみを急かす。線が生まれたがっついて、きみは深呼吸する。切る、はやく、ここから、

遠くへ。きみはもう一度カッターの刃を手首の上で滑らせる。手首の上に薄く白い線が浮かび上がり、少しの間待っているとプチプチと赤い血の粒が溢れてくる。粒はだんだん大きくなつていき、耐えきれなくなるとその形を失い、重力に従って垂れていく。きみの血は、便器の中に沈んでいつて薄く赤い濁りをつくる。血が流れていく。出ていく。呪詛が抜けていく。心臓が軽くなる。きみは流れる血を定まらない目で見て、いちおう、血が通っているんだな、と思う。いちおう、生きている。トイレトペーパーを腕にぐるぐる巻きにして血を拭い、リュックの中から引っぱり出した絆創膏を三枚重ねて貼る。トイレから出るとそこは放課後・斜陽の刺さる高等学校で、野球部の掛け声や金管楽器の音色がひとつの風景として捏ね上げられている。きみは授業が終わった後に担任に呼び出され、進路についてのお話をされる。この成績じゃあ第一志望は行けないよーと言う生物教師にきみは、夕陽を浴びながら第六志望まで決めさせられて悲しいね。お話の途中からきみは攻撃的な沈黙を誓って、呆れた表情で口の一方に苦笑いを浮かべた教師は、また今度親御さんと話そうか、ときみを解放してきみが一目散に駆け込んだ先はトイレ。再びきみがトイレから出る時、手首の線が増えたことを知っているものはいない。きみはたくさん勉強をして天才大学に行きたかったのだけれど、きみの体と心はままならなくて、ままならないまま生き続けているから人生がうまくいかない。その上手いかなさを青春の懊悩に回収させてしまっても構わないけれど、きみは時にままならなさを都合のいい盾にしてしまう傲慢さも持ち合わせている。あまりに落ち着きのないきみに疲れてしまったきみの母親は、中学一年生のきみを病院に連れて行った。きみはその時のことを確かに覚えていて、短い診察のあとに、長い病名がついた。処方された薬を飲むと少し落ち着いたけれど、薬に落ち着かされているというのがきみには癪で、飲むふりをして川に投げ込んだりしてしまう。勉強には集中できず、部屋は汚くて、朝は起きられない。きみは自虐的に社会不適合者を自称することがあるけれど、それは皮肉を用いた社会批判であるということを、きみ以上にきみの傷口が知っている。きみは解けた靴紐を結ぶためにしゃがんだ。きみは不器用だから、すぐに靴紐は解けるし、卵を割るのも下手だ。一度しゃがんだらもう二度と立ち上がりがたくなって、そういうところがきみらしいのだ。廊下の片隅でしゃがんだまま、光を浴びていた。光は熱を持っていて、きみはあたたかくなれる。うとうとと眠気が風のように香ってきて、きみの指先は不意に上靴の踵に触れる。この辺りだ、と思う。高校一年生の頃に所属していたバドミントン部での練習の最中、以前から兆していた足の痛みが決壊したように急激に増し、医者に行ったきみは「ああこれは過剰骨だね」と診断を下される。きみには余分な骨がひとつある。過剰。多すぎて余ること。ならば過剰骨は、骨が多すぎて余ることだ。きみには、普通の人より骨がひとつ多いと言うのが信じられない。自分の体・心のままならなさはこの余分な骨のせいではないかときみは思ってしまうことがある。普通に生活しているみんなは自分より骨が一本少ない。部屋が汚いとか、朝起きられないとか、そうやって言葉にすると陳腐な、みずからの脆弱な魂を丸裸にされるような反吐の出るままならなさは、ぜんぶ、この足にある余分な骨のせいだと、きみは思いたい。宿題を忘れるのは骨が一本多いから。空が曇っているのは骨が一本多いから。息が苦しいのは骨が一本多いから……。きみはそれが無様な言い訳で、逃避であることをわかっている。逃避そのもの恥ずかしいと感じながらも、きみは逃げなきゃ生きて

いけないから、息ができないから逃げるしかなくて、それがどうしようもなく醜くて、ふらつと死にたくなる。そうやって線を増やす。逃げる、逃げる、逃グロ、グロ、本当にグロみたいな毎日で嫌になる！ひとりの廊下できみはしゃがんで泣いている？ご飯を食べて眠くなつて行き場を失ったせいよくを発散させて、それだけじゃなく、あたしは女の子（笑）だから股から血が出たり止まったりを繰り返すゾンビだ、ってきみは泣く。ただ生きているだけなのにいつでもどこでもグロが吐けて、いつでもどこでも自分のグロの処理をしなくてはならない。きみは思い出す。きみが小学校二年生のとき、体調が悪くて部屋の床に吐いてしまった時、お母さんにバレたら怒られると思ってひとりで片付けた記憶。怒られるはずもないのに、物心ついてから初めての嘔吐に動転した幼いきみは、自分の体の中からぐちゃぐちゃの汚い何かが出てきたのが気持ち悪くて、これを見たらきつとお母さんも気持ち悪がるに違いないとそう思った。きみは洗面所から持ってきたティッシュで小さくこぼれた床の上の吐瀉物をバレずに拭き取ることに成功したけれど、そのティッシュをそのままゴミ箱に捨てたから結局お母さんにバレて怒られてしまったね。の、記憶。そういう笑い話も、きみのその余分な骨が生み出してきたのだろうか。きみは学校と同じくらい母親のことが嫌いで、でも母と娘で、それがどうしようもなく嫌だ。きみのお母さんは宇宙と繋がっていて、占い師をやっている。路上で、しかも駅前的大通りで、きみの母親は手の皺を見る占いをしている。クラスのみんなにはわからないだろう、自分の母親が根拠のないスピリチュアルに生きていて、それをこの街の一番目立つ場所で晒しているという、その恥ずかしさを。友達に、あなたのお母さん、駅前で手相占いやつてたよねと笑われる苦しさを。クラスのお調子者の男子がふざけてきみのお母さんに占ってもらった次の日、結婚線が頭脳線がこのうの、と高らかに話す男子生徒の声を聞くことの屈辱を。きみは一度、きみの母親が手相を見ている姿を見たことがある。きみのお母さんの手相を見るその眼差しは、きみに見せたことのない真剣なもので、きみは悲しくなってしまった。きみには父親がいないから、ずっと母親に甘えたかったよね。きみのお母さんは、お弁当に毎日になんじんの煮物を入れるから、それを見たクラスの女子たちは、学校祭のきみのクラスTシャツの背ネームを勝手に「になじん大好き」に変えて発注した。母親の作る弁当を馬鹿にされたことにも腹が立ったけれど、何も知らない人から「その背ネームなに？」と訊かれるのも嫌だった。はじめから弁当になじんが入っていないければ、あんな思いも母親への罪悪感も感じずに済んだのだけれど、きみの母親はきみのそんな思いを知らない。きみはきみの惨めな思いを、きみ以外の誰にも話さないから、きみはひとりで苦しい。陽が傾いてオレンジ色を帯びている。半透明な夏は、夏のなつなつしさを誇示することをやめて、晩夏の風を吹かせた。足を引きずるように廊下をふらふらと歩くきみは、名前を呼ばれた気がした。振り返ると、きみのきゆるきゆる回転させた眼球が捉えたのは天使の姿だった。その天使は翼の代わりに植物の茎でできた車輪を肩甲骨に生やしていて、寂しそうな顔をしていた。きみが知っているような天使の姿とは大きく異なっていたけれど、きみはひと目見ただけで天使だ、とわかった。背中の車輪はゆっくりと回転して、巨大な運命を背負っていた。痛いでしょう……。天使は呟いた。その目はきみの手首に向いていて、きみは反射的に背中後ろに腕を隠す。手を見せてごらん。天使の口調は海風みたいに優しく、きみの中で忘れ去られていたドアに干渉してくる声

だった。きみはさわさわと音をたてて回る車輪をぼうっと見つめながら、右手を差し出した。

天使はきみの手にふれ、その中の骨を確かめるように、深く探るように握った。天使はあたたかくて、きみは許された気分になる。あなたは、つらいことって、ある？ きみは天使に尋ねる。あるよ。天使は目を細めて笑う。天使だってつらいことばかりだよ。そうなんだ。楽しいことは？ 楽しいことはある？ あるよ。もちろん。だってほら、きみと出会えた！ きみと、きみと……。ねえ。なあに？ 天使の輪っかは、何でできてるの？ これかい？ これはね、余った骨でできてるよ……。それからきみは天使と手を繋いで帰路についた。夜の風が涼しくて、天使もそう思っているようだった。街はなんだか騒がしくて、サイレンが行き交っていた。なんだろうね、どうしたんだろうね、と天使と話していたきみは、道の突き当たりで燃えているきみの家を見る。燃え盛る家に向かってきみは走り出して、消防隊員に止められる。おか、さ、お、お母さんが。きみは声にならない声で叫ぶけれど、燃える火の音にかき消される。天使はいなくなっていて、きみは消防隊員の腕の中で暴れる。家が、きみの家が燃えている。ともしびのきみは燃えている家を、ただ見つめていることしかできなかった。きみの感情は、感情の速度を超えて知らない街に到達してしまう。本当に心臓の辺りが内側に畳まれていく痛みがあつて、ああ心はここにあるんだなと気付く。火。火の音。燃えている……。声がした。きみの名前を呼ぶ声だ。きみは忘我の最中に声を聞いた。よく聞き慣れた声で、少しずつあたたかくなってくる。消火活動が始まり、火が弱まってきたところで初めて、きみはきみのお母さんの腕に抱かれていることに気づいた。よかったあ……ほんとうに……ほんとうに……ときみの母親は涙でぐずぐずになりながらきみを抱きしめていた。きみたちは消えゆく炎を背に抱きしめられた。きみのお母さんは、きみの手を握って言った。あんたは生命線が短いから……。しばらくして消火が完了し、きみたちは覆面パトカーに乗せられて警察署の待合室に連れていかれる。待合室でもきみのお母さんはまだきみの手を握っていたから、きみは流石に嫌気がさして、しかし悪い気分はしなくて、整理がつかなくなってきたからトイレに向かった。個室の鍵を閉めて、きみはきみの手のひらを見つめる。皺の少ない綺麗な手だった。星が落ちていくような流れの線が何本か目立っていて、それだけだった。きみにはどれも結婚線で、どれも頭脳線かも知らない。けれど、生命線だけは知っていた。確かに短くて、きみは笑う。その手できみは踵に触れてみる。余った骨がどこに埋まっているのか、きみには正確な位置はわからない。わからないけれど、たぶん、この辺りだ。生きているあいだ、きみは自分の骨に直接触れることはできない。でも、触れたいんだろう？ きみは、きみは骨に触れて、ままならなさはこの骨のせいではないということ、ほんとうは証明したいのだろうか？

でも、きみは触れられない。生きているから。それなら、ときみは思う。それなら、あたしの一本多い骨はあたしがこれから出会うであろう最愛の人に触ってほしい。最愛の人に、全部が焼け落ちて骨だけになったあたしの、粉っぽい白いかけらの中から、たったひとつ、あたしにしかない骨を拾い上げてほしい！ あたしだけの骨で、天使の輪っかをつくってほしい。最愛のあなたに……。きみは、手首に貼ってあった絆創膏を勢いよく剥がす。固まっていた血ごと剥がれて、すぐに新しい血が滲んできた。きみは指先でその血に触れて、生命線をなぞった。赤い線が手の上に描かれていく。すぐに生命線の尻尾にぶつかったけれど、お構いなしにその

先の軌道を描いた。線は手のひらをはみ出して、腕をのぼってきて、それからきみの体から飛び出した。線はどこまでも伸びていくから線である。線は生きていて、どこまでも自由だ。雨降る街や捨てられた国を超えて、きみから伸びた線が続いていく。線はきみの住む街の裏側で起こっている戦争まで届いて、銃撃戦で交わされる弾道につながった。きみが撃ったその弾丸はきみの敵に命中して、貫通した線はまた世界を巡る。地球儀を回すように線は回転を繰り返して、速度を得る。加速し逆行し、線は時間を遡るように伸びた。別の国、別の時代で向日葵の絵を描くきみの、その筆の運動に線はつながる。やがて耳を切り落とすきみは、死ぬまで愛のうちに絵を描き続け、きみのその生命の最後の一筆、強く伸ばされたその線が、運命と名付けられた音楽を紡ぐきみのいる場所まで届く。伸ばされた線はきみの五線譜につながり、音楽が生まれた。きみは楽譜を引き伸ばして音符を置いていく。音楽に魂を売ったきみは運命のメロディを奏でる。耳の聞こえないきみの生まれて初めての打鍵が、いのちの速度で伸びていく。きみの線は世界を巡って、それは地球の運動とは関係がなかった。世界はきみのもので、きみだけのものだ。まばたきとまばたきの隙間に、地球が数えきれないほどの逆回転を行って、そこに人間はいない。きみはまだ人間ではなくて、進化の途中の猿だった。きみは深い森の中で仲間から逸れてひとりだった。きみはまだ若くて世界の事情をよく知らないから、ひとり是不安だった。きみは湖を覗き込んで、映り込むきみの姿を見た。水面に触れると、湖に映るきみの輪郭は揺れて、しかし水面を覗き込んでいるきみの輪郭に触れるとそれは揺れていないから、そうか、世界はいくつもあるのか。そのことに、その世界の秘密に気づく、最初のいのちがきみだった。きみは湖を離れて近くに落ちていた石を拾う。きみは石を握りしめたまま走り、巨大な岩壁に辿り着く。そこできみは、きみの世界を生きたために線を描いた。握りしめた石で岸壁を削り、長い線を描いた。遠い未来から伸ばされた線はそこにつながった。きみは空を見上げて吠え、その響きは地球の外にまで届いている。そこは宇宙で、線に溢れている。星々は線を描きながら回転し、衝突や爆発を繰り返して線と線が結びつきあう。伸びる線を辿っていくと、いつの間にか太陽系は遠くに小さく見えるだけになっていて、銀河の巨大な渦に巻き込まれている。星が集まってひとつの世界を形作っていて、銀河は自分が銀河であることには気がついていない。世界はそうして存在していて、きみから遠く離れた世界であっても、そこは確かにきみの生きている場所と同じ世界の秘密を共有している。世界はきみだけのものだ。きみの世界を如何様にも変えることができるきみは、きみから遠ざかっていく世界の存在を確かに認めて、どこかで生きている彼らの世界は、彼らだけのものであることを承知しなければならぬ。銀河団は共に笑い合っている。彼ら星々は、レスト・イン・ピースの逆を生く。星はきみに語りかけている。燃え尽きるな、燃えながら死ね！どこかで超新星爆発が起きる。星は祝福するように回転する。そのうちのひとつが、誰かと繋がった線から外れて、みずからの線を描こうと試みる。その星は地球に向かっていて、その長い旅路に身を削られながらも、みずからの線のために生きようとした。太陽が破裂する前に、済ませなきゃならないことがあるんだ。星はそう言った。それが地球を目指す理由だった。衝突、衝突、衝突を繰り返して、星は随分小さくなってしまった。地球はすぐそこにあった。大切なのはたどり着くことではなく、向かうことだった。星は最後の力で地球に向かって降り注いだ。いくつもの層を抜

けて、星は星ではなく、ただの岩になっていた。星は満足気に死んで、あとは落ちるだけだった。岩はゆっくりと曲線を描いて地球に落下した。そのすぐ近くには変電所があって、隕石の影響で街の電力は消滅した。それをきみは眺めていた。大停電の到来を車の助手席から眺めていたきみは、小説を書いているぼくだった。ぼくは車から降りて、光を失った街を歩き始める。きみは線を書くように小説を書こうと思った。それが今の自分がやるべきことだと思った。この世界はぼくだけのものだから、語り部はぼくで、ぼくはきみをずっと見つめていた。ぼくはきみで、ぼくのことを眺めるようにきみのことを書こうと思った。きみは小説を書くのが好きで、書いている時のぼくはいつもしあわせそうだった。昨日の晩、部屋に積み上げられた本の山を見て苦しくなったきみは、ついに言葉がぼくに切っ先を向けたのだと思った。逃げするように小説を書いた。一本の直線のように、すべてを迂回して、すべてを経由する直線のように、一筆書きで小説が書きたかった。それができれば、ぼくは満足だった。結局のところ、ぼくはきみを確かめていただけだったのだ。言いたいことは特にない。手を繋ごうとか、傷を舐め合おうとか、そういうことがしたいわけじゃなくて、なんというか、居たことを確かめていただけ。きみがここに確かに居て、ぼくもその隣に居たということ、それを確かめたかった。だから、ぼくの言葉が届かない場所なんてないと思う。あなたのふるえることばはたましいだ。書くと同時に書かなかったことの影が色濃くこちら側に伸びてきて怖いけれど、どうにかそういった出来事を乗り越えて、その先で遮光カーテンが風に揺れていれば、きっとそれで問題はないはずだ。ぼくはきみとのすべてのオモイデを燃やす。きみは、きみのためだけに光ってほしい。ぼくはひとつずつ、丁寧に光り返そうと思う。ぼくの言葉の中には街があつて、その街には人が住んでいて、金持ちはいない。人の望むままに風が吹き、光は光の望む場所に降り注いでいる。瞬間と瞬間のあいだ、何か兆していることを感じさせるような瞬間のはざまに、突如として街は滅び、同時に再生する。その死と蘇生は革命由来の産物で、舐めたら苦い。そのにがみこそが苦しみであり、延命治療のための人工臓器コトバを駆動させるエンジンだ。街を見下ろしながらぼくは、旋毛から爪先までレインコートを被るみたいに、生と死を同時に享受するみたいに光る。そうやって言葉を綴ろうと思う。ぼくは今、街を歩きながら星を見ていて、星空が、ほんとうにすごく綺麗なんだけど、きみに見せられないのが残念だ。試しに写真を撮ってみたらフラッシュが焚かれてしまって、星はひとつ残らず消えてしまった。ぼくは恋のひとではないと思うのだけれど、でも、きみと生きたいと思っている。しあわせにならなくてもいい。美しくなくてもいい。つまらなくてもいい。カッコ悪くてもダサくてもいい。ぜんぶどーでもいい！ きみはきみの生活があるんでしょ。続けるのも終わらせるのもきみの勝手だ。だけど、軽々しく生きられないから、ぼくは必死でやっているよ。きみの伸ばした線がどこまでも伸びていくということ、ぼくは知っている。生き抜こうぜ。台風が来ても、愛憎が竜巻いても、ぜんぶ追い風に変えちゃおうぜ、言葉があるから、きっとぼくたちは大丈夫だ。

そうして小説を書くきみは、長く引き伸ばした直線の端をここに置いて、物語を中断する。再び線を引き伸ばすべき時が来たのなら、この地点から再開するのが簡単だろう。考慮すべき

なのは、簡単な方法が見えやすい位置に置かれているとき、本当にそれを手に取るべきなのか、それだけだ。